2019年(令和元年)11月25日

ほっかいどうNIE通信

Newspaper in Education

第92号

発行　北海道NIE推進協議会　〒060-8711　札幌市中央区大通西3丁目6　北海道新聞社内　☎011-210-5802　FAX011-210-5826

北海道新聞ホームページ「NIE」(http://nie.hokkaido-np.co.jp/) でバックナンバーから閲覧できます

「深い対話」どう育む

NIE全国大会　宇都宮に1100人

日本新聞協会主催の第24回NIE全国大会が8月1、2の両日、宇都宮市で開かれた。全国から教育、新聞関係者ら約1100人が参加し、公開授業や実践発表を通して新聞を活用した学習の意義を確認するとともに課題に向き合った。

大会スローガンは「深い対話を育むNIE」。初日は市文化会館を会場に、記念講演とパネルディスカッションを行った。

国語教諭、大村はまさん（1906～2005年）の教育理念を引き継ぐ「大村はま記念国語教育の会」事務局長で作家の苅谷夏子さんが記念講演。「NIEの先達　大村はま―三つの実践例をたどりながら―」と題して、大村さんの教育活動を紹介した＝3ページに要旨＝。

パネルディスカッションのテーマは「新聞で育む深い対話」。子どもたちの言語活動をより深く豊かなものにしていくために「生きた教科書」である新聞は何ができるのかを考えた。

新聞のスクラップ作品コンクールに親子で応募する吹上二海さん（高2）は「自分が知らなかったこと、興味がなかったことにも目を向けられる」と話し、母親の順子さんは「記事を読んで意見を出し合っている」などと、新聞の活用方法を紹介した。

2日目は同文化会館と市総合コミュニティセンターで6校の公開授業、10校の実践発表などを行った。このうち宇都宮市の文星芸術大付属高校2年の公開授業は、新聞を「教科書を補うリアルタイムの教材」と位置づけ、新聞記事から生徒が選んだ「出生前診断」をテーマにディベートを行い、その是非を考えた。

全国大会は、20年11月に東京で、21年8月に札幌で開催が決まっている。札幌での全国大会は19年ぶり2度目。

「出生前診断」の賛否で、意見を戦わせた文星芸術大付属高2年の公開授業＝8月2日

NIEの活性化策　アドバイザー議論

北海道・東北ブロック

日本新聞協会の北海道・東北ブロックNIEアドバイザー・NIE推進協議会事務局長会議が9月14日、青森市の東奥日報社で開かれ、北海道と東北6県のアドバイザーら約30人がNIE活動の課題などについて意見交換した。

開会式では、同協会NIEコーディネーターの関口修司さんが「全国学力・学習状況調査とNIE」と題して基調提言をした。

関口さんは、小中学校の国語では調査問題に新学習指導要領の趣旨がいっそう強く反映されるようになったとの認識を示した上で「子供が、日常から新聞を読みコメントを書く生活習慣を定着させるべきだ」と強調。教師や子供が日常から複数紙を目にするための環境作りの必要性を訴えた。

各推進協議会からは「人口減少に伴い学校の統廃合が進んでいる。学校を拠点としながら地域に対してどうやってNIE活動の広がりをもたせるか」などといった課題が挙げられた。また、「NIEのカリキュラムマネジメント」「社会に開かれた教育課程とNIE」などをテーマにしたグループ討論も行われ、「学校要覧にNIEを明確に位置づける」「PTAにも積極的にNIEをアピールする」などNIE活動の活性化策について意見が相次いだ。

グループ討論の結果について発表する、北海道から参加の朝倉一民主幹教諭（札幌市立伏見小）

「教室と社会つなげよう」

徳島・鳴門　NIE学会が大会

日本NIE学会第16回鳴門大会が10月19、20日の2日間、徳島県の鳴門教育大学で開かれ、教育関係者らが新聞を教材にした授業実践などを学んだ。鳴門開催は8年ぶり。

初日は学生を含め約200人が参加。同学会の阪根健二会長、徳島新聞の岡本光雄編集局長、元小学校長の野口幸司徳島新聞NIEコーディネーターが登壇し「教室と社会がつながる学びを」を主題に話し合った。

2日目は各分科会で研究発表が行われた。佐賀県唐津市立肥前中学校・光武正夫教頭の新聞広告を主教材とした道徳科の授業や、地域と連携する「京都子ども記者クラブ」の取り組みなど計20件の実践例が報告された。

大会行事として初日は地元高校生による阿波人形浄瑠璃が披露されたほか、「国語教育の神様」故大村はまさん（1906～2005年）の学習記録などを集めた「大村はま文庫」が期間中、特別公開された。

新聞広告を使った授業を発表した佐賀県唐津市立肥前中の光武正夫教頭

まとめ新聞 公開授業を報告

NIE研究会研修　岩見沢中央小の冨樫教諭

教師らでつくる北海道NIE研究会（会長・兼間昌智札幌市立もみじ台中校長）の夏季研修会が8月9日、北海道新聞本社で開かれ、約30人が実践発表や講演を通して意見交換した。

実践発表は、岩見沢市立中央小の冨樫いずみ教諭が、NIE空知地区セミナー（7月18日、岩見沢市）で行った、まとめ新聞づくりの公開授業について報告した。記事や見出しのコツをプロから学ぶ授業構成とし、新聞社のNIE担当者とのかけあいを織り交ぜながら実際に見出しを考えさせた様子を説明。「チームで話し合っての見出し作りから、実生活でも対話が必要との気づきも生まれた」と話した。

夏季研修会で、NIE地区セミナーの公開授業について報告する冨樫いずみ教諭

池田町立利別小の高橋真登教諭は、はがき新聞を活用した取り組みを、平取町立平取中の福井剛史教諭は新聞記事から題材を決めて主張文を書かせる取り組みをそれぞれ報告した。

北海道新聞社の工藤哲靖NIE推進センター長が「新聞記事の裏側～海外支局の経験から」と題して、自身の北京駐在経験を交えて講演した。

身近な話題取材 北大生壁新聞に

北大教育学部の2019年度前期講座「地域づくり学習論」（担当・浅川和幸教授）で、北海道新聞社のNIE担当者が「壁新聞製作を通じて地域を知る実習」を指導した。

同講座は北海道NIE推進協議会の「大学のNIEを考える会」への浅川教授の参加がきっかけで、18年度に初めて開設され、今回が2年目。

学生たちは3班に分かれて「北大恵迪寮」「まちづくり活動に取り組む北大生」「札幌の水」などを取材した。取材と新聞製作によって、地域理解が進むことを実感していた。

NIE実践奮闘記

千歳市立勇舞中教諭　中澤 伸枝

「ほっかいどうNIE通信」のバックナンバーをいただき、「NIE実践奮闘記」を読ませていただきました。皆さん長年NIE活動に関わってこられ、数々の実践を残されている方々ばかりで、私などの拙い実践を披露することがためらわれました。原稿を軽く引き受けてしまったことを後悔もしました。お目汚しになるかと思いますが、自分の今までの実践を振り返り、反省を込めながら紹介させていただきます。

「国語の力を付けるにはどうすればよいですか」と、生徒によく聞かれます。幼児期の読書体験が重要であることはわかっていますが、もうすでに中学生になっている生徒に、それを説いても詮無いことです。そこで、新聞を読むことを勧めます。でも、それで新聞を読むようになる子はわずか、というよりほとんどいないでしょう。そこで、長期休業には新聞のスクラップづくりなどの課題を出してきました。ただ、それだけでは学習効果は十分ではないと考え、思い浮かんだのがコラムの書き写しです。文章の書き方、語彙の使い方など、国語の力を付けるにはうってつけであり、さらに、今世の中で起きていることを、広い視野で読み解くことも大きな魅力です。

国語力へコラム写し／廊下にコーナー新設

20年以上前、書き写しを始めたころ、大学入試で朝日新聞の「天声人語」から出題されたというニュースが話題になり、まさにわが行っている書き写しです。10年ほど前から始めました。書き写すことに加え、読解のテストを行います。「NIEノート」には書き写しのほかに、漢字の読み、意味調べ、記事に関連すること（例えば、作家の他の作品名など）など、自由に書き込んできます。そのノートを見ながら読解テストに臨みます。

生徒には「NIEノート」を用意させ、印刷したコラムを貼って、書き写すことを指示しました。感想を書くかどうかはそれぞれに任せました。

この活動を続けていくうちに、一つの疑念が生じてきました。書き写すことが作業になっていないかということです。

そこで改良したのが、今教科の既習内容と関連するもの、中学生が興味を持ちそうな内容などの観点で読んでいて、これだというコラムに出合えた時の喜びはひとしおです。

ただ、この実践はあくまでも私個人の取り組みであり、独善的、自己満足にすぎないのではないかと、反省しています。というのは、昨年の12月に、児童・生徒の作文を紹介する北海道新聞の「ぶんぶんｔｉｍｅ」に初めて生徒の作文を投稿したことがきっかけとなり、NIEの学習会に参加させていただき、NIEの普及のために尽力されている先生方の実践のすばらしさに触れたからです。

意を得たりと一人悦に浸っていました。

生徒の感想は「社会の物事について、興味を持って考えたり調べたりする力が付いた」「最近のニュースに関心を持ち、自分の考えを持つことができた」「語彙力が上がった」など、おおむね好評でした。もっと難しい記事にしてくださいと要望する子もいました。

コラムを選ぶのも楽しい作業です。国語に限らず他

再任用最後の年となりましたが、少しでもこの活動の一助になれたらと、今年、1年生の廊下の壁に「NIEコーナー」を設けさせてもらいました。コーナーには新聞の切り抜きやコラムを使った自作の読解問題などを置いています。これから充実させたいと思っています。新聞に興味を持つ生徒が、一人でも増えてくれることを願って。

新聞の「よさ」実感

帯広 全新研大会、北海道セミナー

第62回全国新聞教育研究大会北海道十勝・帯広大会（全国新聞教育研究協議会など主催）が7月30、31の両日、帯広市のとかちプラザで開かれた。帯広では7年ぶり4度目。今回は北海道NIE推進協議会主催の第5回NIE北海道セミナーを兼ねた。地元十勝地方をはじめ、2日間で全国から小、中、高校の教諭ら延べ400が参加、公開授業や実践発表などを通して新聞を活用した学びへの理解を深めた。

新聞の写真で作ったかるたで遊ぶ緑丘小の2年生＝7月31日

初日は元高校教諭で作家の宮本延春さんが「オール1の落ちこぼれ、教師になる～子どもに笑顔を～」をテーマに講演。「子どもの自尊心が満たされるのは、自分が自分でいるだけで愛してもらえるとき」などと話した。

5グループに分かれた分科会では、十勝管内幕別町立札内南小の市原秀樹教諭が、「新聞の『よさ』を実感できる新聞教育を目指して」として、学習新聞づくりの指導や、ワークシートの活用事例などを紹介した。

2日目は公開授業などが行われた。帯広市立緑丘小の竹内允人教諭は、2年の生活科授業で、新聞への興味や関心を引き出すために新聞に掲載された写真を使ったかるた作りを行った。竹内教諭は授業を終え、「発達段階に応じた新聞の活用法がある」と話した。

2紙の社説読み比べ 日胆セミナー

NIE第14回日胆地区セミナーが8月30日、苫小牧市立ウトナイ中で開かれ、同校の田倉有紀教諭が3年国語の授業公開を行った＝写真＝。

北海道NIE推進協議会、日高NIE研究会の主催。田倉教諭は新聞2紙のパラリンピック関係の社説について内容や文章構成を比較した。グループでの話し合いなどから「社説はデータなどの事実と意見を効果的に配置し、読み手を納得させる工夫をしている」といった視点を導き出した。

ほかに苫小牧市立明野小の上田真太郎教諭、日高管内新ひだか町立高静小の鹿海圭吾主幹教諭、鵡川高校の堺庸充教諭がそれぞれ実践発表した。

新聞作りプロに学ぶ 空知セミナー

第14回空知地区セミナーが7月18日、岩見沢市立中央小で開かれた。空知管内の小中高校の教諭ら25人が参加した。

同小の冨樫いずみ教諭が6年生の総合的な学習の時間で、「対話を大切に、プロに学ぶ新聞作り」の授業を公開した。記者経験者から記事の書き方や見出しの付け方の説明を受けた。

実践発表は、岩見沢市立栗沢中の川端春代教諭が「学校図書館から新聞の良さを伝える」について、美唄尚栄高の伊藤めぐみ教諭が「HEADLINEから読み解く英字新聞」についてをそれぞれ報告した。

東日本震災テーマに 釧路セミナー

第18回釧路地区セミナーが6月26日、釧路市の北海道教育大付属釧路中で開かれ、釧路管内の小中高校の教諭ら約50人が実践例を学んだ。

付属中の細野歩教諭が8年前の東日本大震災をテーマに2年生の社会科の公開授業を行った。崩壊した岩手県釜石市の防波堤について書かれた記事などを使い生徒同士で話し合わせた。生徒からは「周りの人を守ることを意識するようになった」などの感想が出ていた。

実践発表は釧路市立清明小・澤田康介教諭がNIE活動の普及に向けた効果的な新聞活用のあり方を考えた事例を、釧路東高・五十嵐猛教諭は「新聞記事を活用したさまざまな『楽しい授業』への取り組み」をそれぞれ紹介した。

SDGsの視点で考える 胆振セミナー

第15回胆振地区セミナーが9月20日、室蘭市立白蘭小で開かれ、福山希望教諭が子ども新聞を教材に使った授業を公開し、6年生が「未来がよりよくあるために」をテーマに将来に対する問題意識を深めた。

児童が記事を読み込み、国連が掲げる「持続可能な開発目標（SDGs）」の17の視点から、地球を取り巻く課題解消に向け具体的な取り組みを考えた。「飢餓に苦しむ人たちに届く食べ物を増やそう」「地球温暖化について真剣に考えよう」など子どもの目線で意見を述べた。この日は参観日も重なり、母親らも加わり約40人が見学した。

また、NIEアドバイザーで苫小牧市立日新小の矢島勲教諭が市町村の魅力度ランキングの記事などを使い道徳の授業の実践例などを紹介した。

大村はまの残した教育とは

宇都宮・全国大会 苅谷夏子さん講演

宇都宮で開かれた第24回NIE全国大会での苅谷夏子さんの記念講演要旨は次の通り。

大村はまは戦後、新制中学に赴任した。複雑な社会を生きるために、中学生たちに言葉の力を持たせたいと考えていた。

当初は、蜂の巣をつついたように教室で生徒がはしゃいでいて、お手上げ状態だった。だが、その100人の生徒のために、荷物を包んでいた新聞などで一晩で100の教材を作り、渡した。すると机も教科書もない教室で、生徒たちが静かに勉強し始めたという。これが、大村が教育に新聞を使った最初だと思う。

教材としての新聞の見極めは厳しかった。記事は時に悲しみや矛盾も内包する。子どもの生活や経験をしのぐテーマは、言葉を鍛えることには向かないと考えた。お気に入りだったのは現役最後の1979年、東京・隅田川の花火大会を報じた記事を比べさせた実践。生徒は人出や船の数などを巡る表現の違いを夢中で探したそうだ。

大村は戦争への深い後悔と苦悩から中学教師になった。子どもたちにリテラシーを持たせ、一人前の言語生活者にすることが、苦い戦争の反省から立ち上がるエネルギーになった。大村の実践は、混沌さを増す世界を生きる私たちに、大事な指針になるのではないか。

21年に札幌で全国大会

10月に記者を派遣した札幌市内の中学の授業

NIEの新たな形示そう

朝日新聞北海道報道センター長　気賀沢　祐介

リレーエッセー　多紙彩々

確か、前回の札幌勤務を終えて東京に戻った頃なので、今から10年以上前のことだ。会社の販売部門との会議で、「都市部では〈むどくそう〉が急速に増えている」という話を聞いた。「むどくそう?」。それが「無読層」と書くとわかるまで、当時は暫く考えなければならなかった。販売の担当者は続けた。「これからは他社と競争する時代ではありません。新聞を読んでいない人たちに、どうやって読んでもらうのかの時代になります」

大変なことだと思った。それまでは「他紙に先んじた情報」「他紙より詳しい情報」にエネルギーの大半を費やしてきたが、これからは「〇〇新聞を読むメリット」だけではなく、単に「新聞を読むメリット」を意識した新聞づくりを心がけていかなければならない。それも新聞を読んでいない人を対象に、ということだ。

個人的な事情で恐縮だが、大学は教育学部で学び、卒論も「マスメディアの教育機能」をテーマにした。NIEも重要な1項目として取り上げた記憶がある。学校現場で新聞が教材として活用されれば、世の中の出来事が良く分かるようになるし、少し難しい文章の読解力も身につく。論理的な思考も育成される。そんな文脈だったはずだ。

学生時代の予備知識が残っていたこともあり、NIEは新聞を読まない世代に浸透させる糸口になるのではないかと、感じた。次に東京から山梨に赴任した際には、積極的に「出前授業」に取り組んだ。年度初めの4月に県内の全小中高校に案内状を送り、要請があった学校に記者を派遣した。意識したのは、出来るだけ子どもたちと年齢が近い、比較的若い記者を選んだこと。記者としての経験が浅く、うまく伝わるかどうか不安もあったが、先生たちには「子どもたちは自分と近い年代の記者に話してもらい、親近感がわいて良かった」と好評だった。小さな県ではあるが年間25件ほどの実績になった。札幌でも、出前授業への記者派遣や学生インターンの受け入れをお願いされることがある。地道だが、新聞や新聞記者を身近な存在と感じてもらえる取り組みを続けていきたい。

ネット社会が加速度的に進み、ニュースはパソコンですらなく、スマホで読む(見る)時代になっている。新聞記者も原稿と写真だけでなく、同時に動画も撮影する。紙からネット、写真から動画と変化する流れの中で、NIEもどう進化していけば良いのだろう。「子どもが新聞を読まない時代」は過ぎ、いまや「親も子も新聞を読まない時代」「家庭に新聞がない時代」に突入している。新聞は子どもにとって、さらに遠く、特別な存在になりつつある。

2021年8月に、NIE全国大会が札幌で開催される。北海道の新聞各社、教育関係者が改めてNIEの現在と将来について、集中的に考える機会となる。大会までの2年間、議論と実践を重ね、NIEの新たな形を模索することが重要だ。今後進むべき新しい方向性を示せるような大会にしなければならないと感じている。

教員免許の更新「NIE」を活用

星槎大が札幌で講習

日本新聞協会の協力で星槎大学(神奈川県)が行うNIEをテーマにした教員免許状更新講習が、横浜、札幌、富山の3会場を結んで8月22～24の3日間行われた。札幌では23日のプログラムを北海道新聞社(同市中央区)が担当。受講者は同社編集局の写真部や編集本部で新聞製作の現場を見学したり、インタビュー実習に取り組んだ。

講習は「新聞を活用した授業デザイン(NIE)を考える」。22日と24日は星槎国際高校(同市厚別区)を会場に、メインの横浜会場(日本新聞博物館)で行われた新聞の読み方、NIEタイムの授業例などをテレビ会議システムを通じて同時受講した。

北海道新聞社で、編集局写真部を見学し、説明を受ける受講者ら＝8月23日

編集後記

〇…2日に幕を閉じたラグビーW杯の準々決勝、日本―南アフリカ戦。NHKの生中継は札幌地区平均視聴率44.5%、瞬間最高視聴率51.8%だった。調査した全国11地区でトップ。道民の高い関心に驚くとともに、「なぜ」とも思った。

〇…大会が盛り上がりを見せる中、全国紙の1面コラムで、英紙に「niwaka fans」という言葉が載ったという一文を見つけた。「にわかファン」。視聴率の押し上げに貢献した人たちだろう。ラグビーファン拡大に大切な人たちだ。

〇…NIEの広がりはどうだろう。「エヌ・アイ・イー」と言ってもすぐに分かってもらえないことがある。「NIE」を「ニー」と読む人もいる。関心度はW杯前のラグビー同様、決して高いとは言えないと感じることがある。

〇…ただ認知度アップへのチャンスはある。2年後、札幌で開かれる全国大会だ。コアなファンはもちろん、NIEから遠い場所にいる人に、どう魅力を伝え振り向かせるか。最初は「にわか」でいい。(坂)